
ヒナゲシの華

水無月奎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナゲシの華

【Zコード】

Z5189Z

【作者名】

水無月奎

【あらすじ】

ヒナゲシさんには同じ年の従姉妹がいます。似通った名前のヒナちゃん。しかし似て非なるもので、顔が違う、スタイルも違う、性格も違っていて、まさに我が人生は比較に始まり比較に終わる。いや、仕方ないんですけどね、現実はいつだってシビアで物語のよくな甘い展開はありえなくて——あれ、目から汗が。減った、今確実に心の中の何かが減った。

そんなヒナゲシの十三からの人生です。あまじょっぱいよ！

五話で異世界トリップしました。
格差人生に慣れた主人公が泣きました。

似て非なるヒナ（前書き）

さてさて、物語の始まり始まり。

似て非なるヒナ

悲劇は、外から見ると喜劇に見えることがある。

対岸の火事であれば、何事もなく平和に滞りなく進むストーリーより、キャストが四苦八苦していることこそが面白い。

その苦悩する様が、涙する顔が、激昂するのが愉しいのだと。他人とは得てしてそんなものなのだ。

などと悟りきつた冒頭を語る私、名をヒナゲシという。漢字は離體粟なのだが、素直にこれが書けるだろうか。いや、書けまい。というわけで、だーれも漢字を思い浮かべて私の名を呼ばないため、ヒナゲシなのだ。

そんなヒナゲシさんが、何人生悟りきつちやつた枯れた台詞呴いてんの、ってな話だが、今現在悲劇真っ只中だからである。他人には面白くて仕方ない類いの。

ヒナゲシは農耕して生計を立てているちつちつな村の小娘なのだが、まるつきり同じ年の従姉妹がいる。名をヒナコ。

この村で年齢がぴったり同じなのは一人だけ。2~3離れた上と下の娘さんもいるが、十三なのは一人だけ。

親も姉妹とくるから、何かと比較されて生きている。

その比較こそが悲劇。他人から見れば喜劇。ちくしょう、運命を呪いたい。

ヒナコとヒナゲシ、という響きは似ているのだが、顔面とスタイルと漢字まで『似て非なるもの』、という言葉がピタリと当てはまる。上に見られる側はいい。へより可愛いね、へより似合つね、へより好きだなあって褒められフイーバーだ。

が、下に見られる方がからしてみたら。～より可愛くない、～と同じように出来ないの？、～だつたら良かつたのに、と。まるで存在するものが悪かのように言われまくる人生をひつ被らされるのだ。詰んでる。人生詰んでるよね。この先の人生全て見えた気分だ。

これが母の語る物語ならば、こんな器量悪しの娘にも一途に想つてくれる男というものが存在するわけだが。

人生、そんなに都合良くはいかない。現実はいつだつてシビアだ。初恋以降全ての恋心を踏みにじられ続けた私は、既に悟りきつている。まともな恋愛はもう諦めよう、と。きつといつかあぶれた男性と見合い婚だ。それも嫌がられるなら、一生独り。あつ、泣いてないから。これ、ただの汗だから。

大人たちの心ない言葉はもうグッサグサヒナゲシの心を突き刺している。その上で成り立つた性格だ。もう清い心のあの頃には戻れない。人生、諦めが肝心である。

どんな台詞にもめげない鉄の心。傷ついた表情など、周りを喜ばせるだけ。そういうわけで、今のヒナゲシは完成している。親も遠い目をする、時々。

「ヒナちゃん！」

いかにも女の子らしい、甲高い声が響く。村を見下ろせる位置で突つ立っていた私は、顔を上げた。

「ヒナ！」

無垢な笑顔全開で走り寄ってきたのは、話題のヒナコさんだった。遠目から見ても可愛い。軽く死にたくなった。

「 もへ、ヒナちゃんつたらーすぐにはなくなるの良へないよー。」

いや、お前に何故にすぐ真横に並びたがるのか。おかげさんで比較しやすく、ますます私は悪し様に言われるのである。

そんな事よりも。

ヒナコの背後に田を移し、うんざりとした。また増えている。

「 後ろの男ども、また増えてんじやん。何で連れてくるかな…」

十三ではあるが、十分女の子らしい可愛さがあるヒナコは、村中の男をもれなく骨抜きにした。その射程範囲は十代に留まらず、二十代三十代にも及ぶ。ロリコン野郎が多過ぎて死にたくなる。逆ハーレムというものらしい。縁のない言葉だつたが、ヒナコが身近にいることで、嫌でも野郎どもの醜い争いを間近で見続けるはめになつた。

「 それにヒナつて呼ぶのやめて。それ、あんたのことだから。むしろ村中の共通認識だから」

それをあえて私に使うのだから、嫌がらせなのかと言いたくなる。あっちのヒナちゃんは可愛いけど、こっちのヒナちゃんは、ねえ…？なんて大人们に言われてみやがれ。確実に何かが減るぞ。

「 いいじゃない、ヒナちゃんと私しか、ヒナつていなんだよ」

うん、貴様が考えなしなのはわかつた。ありがとう、君の無邪氣でより一層傷つけられます私。

背後に並ぶロリコンどものうつとり顔も吐き気に繋がる。私の体調不良は貴様らのせいだ。死ねよほんと。

「ねえヒナちゃん、今度の収穫祭で歌と踊りを披露するの」

「ぜつてえー嫌だ」

「まだ言い切つてないのに」

何が言いたいのかは瞬時に把握した。

この幼馴染は、本気で理解してないのかと突き詰めたくなるほど、私と同じ舞台に立たそうとする。それがどんな悲劇を引き起こすか知らないで。

歌と踊り? こいつと一緒にやつてみやがれ。ますます格差社会が生まれるじゃないの。主に私とヒナコの間に。

何でお前いんの? と怪訝な視線を集める晴れの舞台での羞恥プレイは一度で十分だ。そこに思い至らなかつた過去の自分も抹殺してしまいたい。

ヒナコとヒナゲシさん。一人一緒に赴けば、お呼びでないと聞いた
げな怪訝な顔をされる辛さがご理解いただけるだろ? うか。
何でここに居るの? 何で?

これほど人を傷つける視線があるだろ? うか。奴らは覚えてなからうが、私は過去の一つ一つ覚えている。簡単に許せるわけがない。ど
どのつまりは孤立してゐることなんだけど。死にたいです。

「ヒナコが一人で歌つて踊ればいい。どうせみんなが見たいのはヒ
ナコ一人なんだから」

ざあ、と気持ちの良い風が吹き、目を細める。ここで居眠りしたら
さぞかし気持ちが良いだろうが、そろそろ夕飯の支度がある。

「じゃーね」

求められるヒナコと求められないヒナゲシ。

求められない存在は、どこへ行けば良いのでしょうかねえ？？

ロコ・リハビリテーション（運動療法）

トライアゴン・リハビリズム。

ロコノンとヒナ

「ロコノンが多くて死にたくなる」

初めてこの言葉を口にしたのはいつの頃だつたか。

私自身のことではない。何故なら私の横には大抵ヒナノとこう光り輝く可愛子ちゃんがいて、存在そのものを霞ませられてきたからだ。うん、泣いてないつたら。

自我が芽生える前から、衆目は私でなく私の横に何故かいるヒナノに注目していた。自覚した後は絶望という名の暗闇へおむすびころりんだったが、性別オスの眼差しは総毛立つほど氣色が悪かつた。

——なんでアンタは平気なんだ。

常に情欲にまみれて見つめられているはずのヒナノが反応せず、向けられてはいない眼差しに私がびびつている。まるで自意識過剰で男を見ているようで、私のテンションただ下がりです。

私の存在に気づかず、男どもが話していくことがあった。

「あああー…ヒナノたんてば体そのものが甘い饅頭みてええ。萌ゆる」

「すっぴすべの白い背中や太ももがなー汚れのないおれの天使たん…いやもうおれの嫁…！」

「断固阻止。ヒナノたんはもれの嫁。清いムスメでありすべてを包み込む母であり淫らなこいびちょ」

ぞわわわわわ。

頭が太もも辺りにきてしまう大の人たちが、ハアハアと息も荒くマシンガントークを繰り広げていた。

気づけよ。てめえらの足もとにいるいたいけな子供によおおおおう！

貧血状態に陥つた私は、吐いた。大きな栗の木の下で。

村に住む大人たちが、一事が万事、こんな調子だつたもので、うつかり好意を寄せた人物の本性を知るたび吐いた。

ダメだ。何かもうこの村超ダメだ。

まともな大人がいない。つーか妻帯者もこんな調子。まともな発言してゐる野郎も裏ではハアハア逝つてた。

怖い。怖い怖い怖い。普通な大人つて実はいないんじやねえの？
この世の人間すべて、ヒナコを認め求める人間しかいなくて、ヒナ
ゲシを求めてくれる人はいないんじゃない？
げろげろと胃の内容物ぜんぶ吐き出した後に、残つたのは厳然とし
た事実。私にはありがたくない現実。

まだ子供と言つて相違ないヒナコ。この先成長すればどんなことにな
なるんだろうか。そしてその時も私は彼女の横に並んでいるのだろうか。同じ名前なのにな、と言わながら。何の罰ゲーム？

ヒナちゃん。ヒナちゃん。

最近では幻聴に怯えるようになった。

近くにいない筈の声が聞こえるんですが、これはあれでしょ？が、
心の風邪とか何とかいうアレ？戦士とも勇者とも呼ばわれる企業戦士たちが人間関係に悩みながらレベルアップして得る職業病？あれ、
私思つたより追い詰められてる？？まだ十三なんだけど。

最近では逆ハーレムも大規模になつてきた。つまりいつでもハフハフしてゐるオスどもを引き連れて参上する。私の胃がねじ切れる日も近い。

「ロリコンが多くて死にたくなる」

ぽつりと零した本音は切実だ。

頼む、少女ボディに「ツアーリー！」しない大人がいる世界に私を連れて行つて。

リアルはきつこよ　ｂｙヒナゲシ（前書き）

二人並んでも空氣。エア存在。

リアルはきついよ　ｂｙヒナゲシ

春の妖精さんともてはやされている。

夏になれば大空を舞う小鳥さん、秋になるとたわわに実る木の実、冬になれば誰にも心を溶かせない冬の女王の寵児と呼ばれる。一年通して人外かよ。

もち、私のことではない。

隣にいるヒナコちゃんことである。

私自身は怒涛の「ごとく浴びせかけられる褒め言葉の流れ弾を受け、魂が口から飛び出している。

——無理。自分が褒められるならまだしも、私なんか全く見えてない人たちの言葉は凶器だ。

しかも妖精とか天使とか。人間やめさせてどうするつもりだ。そしてこんな言葉の暴力に何故にお前は『満悦なんだ。

憲りずに入外の隣に立つお前はバカかと思われた皆さま。150cmちょいしかない私たちを取り囮むこの壁が見えてますか？私の頭の上に胸部がありますよね？そんな彼らが円陣を組んでますよね？

もちろん注目は隣のヒナコちゃんだ。収穫祭のためにと彼女の母が精魂込めて縫い上げた一張羅を着て、貢ぐことに余念のない男たちの怨念のこもったアクセサリーを散りばめた彼女しか見ていない。それ以外に見るものなんぞない。ここには。アタシトカナー！

だが。私は彼女と従姉妹なのだよ。同じ年のオンナノコなのだよ。

片一方だけが着飾つてゐるわけがないんだよね。親が姉妹ですしね。たとえ片一方の母親があんまり裁縫得意じゃなくて、娘を飾り付けのプラスアルファなアクセサリーを忘れててもね。同じ意味で着飾つてるんだから、並べられる。当然のようだ。

「ハアハア。萌ゆる。ちょー萌ゆる。何あのスカート丈。何この襟ぐり。ちょ、おま。髪をかき上げるたび薫るフローラル。買う。絶対同じシャンプー置う。そんで同棲ごっこしちやう。むほつ！」

初恋のお兄ちゃんが何か言つてる。

うん、意味なんか考えちゃイケない。今にも逝きそうな男がそこに居るからな。ここで倒れてこいつらに触られるなんて願い下げだ！

顔面蒼白で今にもリバースしそうに汗かいてる私なぞ、誰一人として気づいたちやいない。か、悲しくなんてないんだからつ！

「ヒナちゃん、みんな喜んでくれて良かつたね！今年も一人で歌おうね！」

『え……』

聴こえない筈の声が空気を伝つて私の耳に飛び込んできた。
え、なに、お前も歌うの？一緒に？天使の歌声に雜音混ぜてどうす
んだよ。

という、何とも痛い本音が。KYヒナコ、デスノート決定。

「ヒナコ、みんなアンタの歌声が聴きたいみたいだよ。一曲歌つて
やつたら？」

そして死ね。あつ、違つた、ここから出せ。

「ええー… ヒナちゃんの歌声とつても可愛いのこ」

むくれたヒナコは妖精だろうか天使だろうか？もつこつそ女王様でいいんじやね？誰もが君に傳ぐ。

「私は老害、アツイイマチガエタ、村長と一緒に来つて来るから。ヒナコは歌つて」

永遠に。そして私に一度と話しかけんな。

速やかにその場から姿を消すという悲しいスキルだけは得ていたので、いつもより華やかになつたヒナコに群がる男の群れから抜け出せた。

振り返る。うん、誰も追つて来てない。当然なんだけど、悲しいね！空氣ダネー！

収穫祭用の一張羅。が、見てもらえなければ無用の長物。虚しいけれど事実です。

自宅でパパッと着替えよう、そうしよう。そんで賑やかましい村の様子とは一線を画して自分の世界にこもる。うん、私の正義は二次元の中。いいよな、じ都合主義。イコール、ヒナコ不在！

何気にオタクをカミングアウトしてしまいました。すみません、腐女子です。現実に耐えられなくて厚みのほとんどない彼らがマイダーリンです。

ノマカプとかやおいとか百合田舎とか普通に口から出ます。いいよな、二次元…。

収穫祭に家に閉じこもるバカがどこにいる、ここにいる、ヒヤツハー！でなわけで誰も見やしねえ一張羅を脱ぎ捨てる。代わりに着替えるのはゆるゆるになつた襟元かつ洗いすぎてめつきり生地が薄くなつた古着だが、どんな辛い乙女ゲーも脱出できないRPGも乗り越えた戦友もある。不満などあるつか。

「さて、ヒナコのいない世界に逝くか！」

この日にこそ相応しいと取り置いていた物語がある。自分を投影できる女の子が、平々凡々な日常から飛び出して、いきなり異世界にトリップしちゃうアレである。何でも鉄板と言われるほど萌える展開まみれらしい。

リアルじゃない友達から聞いた話だと、あなたは勇者だ！と選ばれた者として王族や神様にチヤホヤされる展開とか。何それ、うらやましそう。私なんて生まれてこの方厚遇された記憶がない。死ねヒナコ。

要約すれば召還された世界で、王子やら王様やら宰相やら神官やら冒険者やら魔法使いと恋愛したり憎まれたりそれは色々多種多様な人間関係に恵まれるとか。な、何それ、私これまでスルーされてばかりで自分の名前呼ばれることすら碌になかったよ…さすが物語、ヒロインに優しい。

そうか…私でも友達を作れたり恋人を作れたりするのか。

涙がこみ上げてきた。他にも色々こみ上げてくるものがある。どんだけヒナコの陰に隠れた人生だったかが染みた。ちょー染みた。

「えーっと、食料に飲料水に書くもの？」

非リアル友達様のメッセを読み上げながら、部屋にこもる下準備を

する。

読み終わるのはとてもとても時間がかかるから、準備をしどかねばならんという話。問題ない、明日は収穫祭一日田である。むしろ一日も二日も現実逃避できるなら、ありがたすぎる。

「意外と荷物が多くて旅行用のリュックサックになってしまった：いやしかし、トリップするため一 giorn 来い非現実…よひこヒナコ不在世界！」

テンションMAXで私は分厚い冊子を開け、そして私は本当に異世界の扉を開けたのだつた。

——本当に開けるなんて聞——い——て——ね——ええええええ——！

「この世界はファイクションです。」（前書き）

到着。けれど肉椅子に。

「この世界はフィクションです。」

完全に不意打ちであつた。

一から丁寧に教えてくれる非リアル友人様に尻尾を振りすぎてしまつたらしい。

異世界に飛び立っているのか、束の間の暗闇の中で、めまぐるしくヒナゲシは考えていた。

信じすぎてバカを見たのは一度ではない。けど外なら、村以外の人ならあるいはと考えていた。

「一バカ過ぎる、ヒナゲシ。この世は私の為にあるのではないと知っていた筈なのに。」

違つ世界に向かいながら、強く強く自分を戒め直し、そうしてヒナゲシは扉を潜つた。

ひゅぽんつ。

と何だかとも気の抜ける音がして、体に衝撃が走る。言つならば不安定だった態勢がようやく安定した、みたいな。

そつと片目を開け、異世界とやらを観察する。

目の前にオッサンがいた。

「あれ？」

てつきり厳かなる神殿とやらで、大勢の前で召喚されているものと思つていた私は、目の前でワイングラス片手にポカンとしてるオッサンに、ポカン返しをした。

胸元をくつろげたシャツに、ワイングラス。何だかとってもリラッ
クスタイルだ。

「えつ？」

が揺れた。 ガン見されているので居心地が悪く、身じろぎしたらビクリと椅子

——待て待て待て。

椅子つて揺れる?しかもビクッと生きてるみたいに。

そろそろと首を動かし、背後を見上げる。さあああああ!!

人間椅子

それも綺麗な綺麗な銀髪のオーラサンに。

- 1 -

- 1 -

お願い、誰か何か言つて。

その足から降りろとか降りろとか降りろとか。

驚愕に目を見開く私とオツサンと銀髪美形。

時が止まつた。

かといつて良い歳をしているお兄さんに、いつまでも乗つかつていいものだらうか？いや、良い筈がない。

「ううと尻をズラす。

「ううと、ううと。」

「ううして体が落ちると思われた瞬間、ホールドされた。

「つ危ない！」

「わああっ！」

「ううやら私が自覚なしにその身が落ちると思われたらしい。長い腕
が、ボディに絡まる。

更に、沈黙。

オッサンはやつぱりワイングラスを持っていて、私は囚われていて、
人間椅子は私を戒めたまで。

何これ、どんな展開？私勇者設定じゃないの？？

混乱も極み。
私は泣いた。

その涙、プライスレス（前書き）

泣きなさい、笑いなさい。

その涙、プライスレス

だばだーっと涙を流す私に、ポカンとこちらを見ていたオッサンが慌てたように誰かの名を叫ぶ。

「り、リーゼシアっ！」

上擦つた声にすぐさま部屋の扉が開いた。意匠の凝つたそれは両開きになつていて、一人の女性が足早に近づいてくる。
目が素早く金髪のオッサン、今は肉椅子となつている銀髪美形、そして壊れた蛇口化したヒナゲシを確認する。私を見た瞬間、驚いたように目が瞠られたが、それも歪んだ視界の向こうのことだ。詳細は知らない。

「な、何だ？どこか痛いのか？腹が減ったか？これは——酒だからダメか、ええと、水？ミルク？リーゼシア、子供は何を飲む？」
「すまない、座り心地が悪いのだろうか？俺も椅子になつた経験は浅くて——待て、出来るだけ椅子になりきる、だから泣き止んでくれ」

ボトボトと涙を垂れ流す私に、立派な大人二人が狼狽している。それを見て取り、ヒナゲシは泣きながら呆気に取られている。
だつて、泣いているのはヒナコでなく、私なのだ。

二人が泣いていれば大人たちはヒナコを取り囲み、気がつけば輪の中から弾き飛ばされていた。

悲しいが事実であり、ヒナゲシの歴史そのまんまである。

もはや何で泣いてるのかもわからなくなつた頃、ヒナゲシはかつてないほどの高待遇を受けていた。

オッサンが呼びつけたリーゼシアという女性に優しく宥められ、涙を拭われる。オッサンが机に並べられた飲み物の説明をしながら、どれが飲みたい？どれでも選べと選択肢を委ねてくれる。銀髪美形はヒナゲシを己の膝から転がり落とすこともなく、尻が安定するよう横抱きに乗せてくれた。いや別に肉椅子じゃなければどうしても嫌！つてわけじゃないんですけど。私ここまで図々しくはないんですけど。

何これ、何なの？これが勇者特典つてやつ？？

小さな村で生きてきて、ここまで自分に関心を示されたことはない。あまつさえ、自分の涙の理由と精神状態を心配されるなんて。

異世界トリップ凄過ぎる…！

流れていた涙は途中から感涙になつた。心中では「ありがとうございます！」と選挙演説者のように感謝を叫んでる。口からも出したが、何が何だかわからなくなつたようで、大人たちはただ優しく頭や肩や背中を撫でてくれていた。

目が、優しい。手のひらが、温かい。

何より、その意識はヒナゲシに向けられていた。

う、あ、うお、うおおおおん…！…！

昨夜は妙齢の女性と寝ました。（前書き）

人と目が合つ。嬉しい。

昨夜は妙齡の女性と寝ました。

十三にして泣き喚くとか超恥ずかしい。けれど生まれて初めて『ヒナゲシ』を見ててくれたのが嬉しくて、それどころか私の涙で感情を揺らさせてくれるなんて天使としか思えなくて、理性がハジけ飛んだ。

おいおいと泣いた私は気がつけば銀髪美形にお姫様抱っこされてベッドインさせられていた。もちろん銀髪美形のではなく、リーゼシアさんという女性のものだつたのだが。グスグス涙の止まらないヒナゲシを優しく抱きしめ、一緒に眠りについてくれた。

泣きすぎて前後不覚に陥るよつて意識を落とし、田代覚めるとお湯で絞った布で顔を丁寧に拭ってくれる。

羞恥心で死にたくなつているヒナゲシに無体を強いることも一切なく、優しく手を引かれて食卓に連れて行かれた。何故か昨日会つたオッサンと肉椅子が居たが。

そして、ハイ、今ここね。

今現在、何故か銀髪美形のお膝に乗つて朝ごはんを食べてあります

…よ…。

いたたまれない、と顔面に貼りつけて懸命に逃れようとしているのだが、昨日日の前で幼子のように泣き叫んだことが念頭にあるのか、まるであやすように朝食を食べさせようとするのだ。オッサンと一緒にになつて。

「まずはスープで喉を潤してからパンを食べるか? それとも先に飲

み物を口にするか。何がいい？昨日はミルクを好んで飲んでいたな。
果実を絞つたものも幾つか用意させたぞ」

テーブルに並ぶ食器が多い。一斤どころじゃないパンが複数種と、
スープの入った皿の下にまた皿が敷いてあるし、サラダにつけるら
しきドレッシングも複数あるようだ。

卵の下にある肉はベーコンやハムより厚みがあって、何かわからな
い。そこは異世界らしさだろうか。

物珍しさからじっと食卓を眺めてしまつたが、お腹が空いていると
でも思われたか。

オッサンが自分の好みか子供向けか不明のジャムを伸ばしてパンを
寄越した。銀髪美形に。

——おい…。

勇者特典なのか、また泣かれてはたまらないと思われてるのか、実
際年齢より低く見積もられているのか、ヒナゲシに羞恥プレイを要
求する。

一晩一緒に過ごしてしまつたリーゼシアちゃんは「ゴーゴー」と見守つて
いる。助けは期待できない。

基本、ヒナコが傍らにいたことで、注目を浴びない生活を送り続け
ていたヒナゲシには刺激が強い。

どうして自分は男性のお膝で食事をしているのか。いちいち食べる
ものをリザーブされているのか。口元が汚れるとすかさず拭われる
のか。さっぱわからん。

私は幼児ではないのだから。

困惑顔で銀髪美形を見上げると、前髪を撫でられた。違う！

ねえリーゼシアさん、と救いを求める田で見つめると、おかわりです
すねとミルクを注がれた。違う！

ちょっとオッサン、と金髪に呼びかけると「何で自分だけ」といじ
けられた。ついうつかり！

口が締まれば喉をくすぐるよつて撫でてくれる。ペットか！

大事に大事にされることに慣れなくて、子供みたいにお世話をされる
のが恥ずかしくて、ヒナ口ではなくヒナゲシを見てくれるのが嬉し
くて、やっぱり涙目になるのであつた。まる。

顧者のアイテムをテイテイ（前書き）

何か仕事下さー。

勇者のアイテムティ

涙ぐんでいる状態がデフォルト化しそうなので、慌ててヒナコを思い浮かべた。

整った顔の作りに、理想的な等身。疚しさの欠片もない笑顔に、周囲に集まる村人。その輪に入れない、入ってはいけないヒナゲシと一緒にナーバスになつた。ごめん、生きててマジごめん。オウフ。

浮ついた気持ちがあっけなく沈静化され、表情も元落ち着いたものに変わる。それはヒナゲシにとって馴染んだ自分自身に相違ない本性だったが、その顔を見た三人——この異世界で出会つたとても親切な人たちは珍妙な顔をした。泣いたカラスがもう笑つた、ということころだろうか。すみません、お騒がせしました。いつもはこんな迷惑な子じやないんで許して下さい。

さあ心機一転！昨日今日の弱虫ヘタレヒナゲシはなかつたことにして、この世界の人たちに報いるべく、働きますよっ！

キリッと表情を引き締め、レバーリーでも勇者らしく見えるように装づ。こここの住人の困りじとは何であろうか？やつぱり魔族に襲われてるとかそういうの？うむ、体力に自信は皆無だが、馬車馬のごとく働く気は満々である。任せろ！

頼り甲斐のある微笑みをイメージし、ヒナゲシは言つ。

「魔族討伐に行きます！」

ここでの地位確保のために。

端的に言つと、断られた。といつも怒られた。意思の疎通を端折りすぎたかもしない。

そういうえば召喚はされたが、この世界の説明やレベルアップ法を聞いていない。ぬかつた。

あれ、そもそも喚び出されたのは神殿とかじゃなくて人様のリラックスルームだつて？うん？向こうで本を開いて異世界に喚ばれるわけだから、向こう側が扉を開いてことになるのだろうか？あれ、召喚は？

「？？？」

こちらが魔法陣とか何かそういうファンタジックな儀式を行い、あちら側にいた選ばれし勇者がどどーん！と不可思議な力に導かれ、世界を渡るのだと思っていたのだが——それだとどこに本を開く必要性が出てくるのだろう。あれ？

私、勇者だよね？？

非萌えのシンナー（前書き）

シリアルスが羞恥に負けた。

非萌えのシンボル

私より魅力のある『ヒナ』を知らず、私こそを『ヒナ』だと思い、ヒナゲシを『ヒナ』と呼んでくれる人がいる。

こんなこと初めてで、昏い歓びが胸にある傷から溢れ出す。少なくともあの本を開いたりしない限り、ここにヒナコが来ることはない。同じ地続きには居らず、世界を超えて離れているのだから。運命の鎖で繋がっていた片割れがようやく離れてくれたような心地だった。

重しになっていた、足枷が外れたのだ！もう一度と傍らで柔らかに微笑むことはない！私の前に立つ人が、私でない『ヒナ』に奪われるのではないか！！

そう思う私は性格が悪いのだろう。顔も確実にヒナコより下だ。けど、これがヒナゲシ。偽らざるものうー人のヒナである。

その劣る私しか知らない人がいる。

口元を緩ませ、慈しんでくれている。

傷つけぬよう、気遣いながらゆつくりと頭を撫でてくれる。自らの膝を差し出し、食事の世話までしてくれているのだ。

ずっとずっと欲しかったもの以上の麻薬を打ち込まれた気分だ。中毒性があり、一度きりでは満足できない。

この優しい微笑みが消えたら泣いてしまうだろう。そっぽを向かれたらみつともなく許しを請うだろう。床に額をつけるくらいの土下座を今してもいい。

村にいた頃は自覚したことなどなかつたけれど、ヒナゲシはずつと

飢えていたのかもしれない。魅力の差で礼遇されるなら仕方ないと諦めた振りをして、惨めつたらしくもエサが欲しい欲しいと。ツンデレかよ。私ツンデレだったのかよっ！？

村での素振りを思い出し、血行が異様に良くなり汗が出た。
突如赤面するヒナゲシを心配する異世界人に、今度は冷や汗が出た。
——私、性格や顔が悪いだけでなく、更にツンデレだったようです。
業は深い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5189z/>

ヒナゲシの華

2011年12月20日20時47分発行